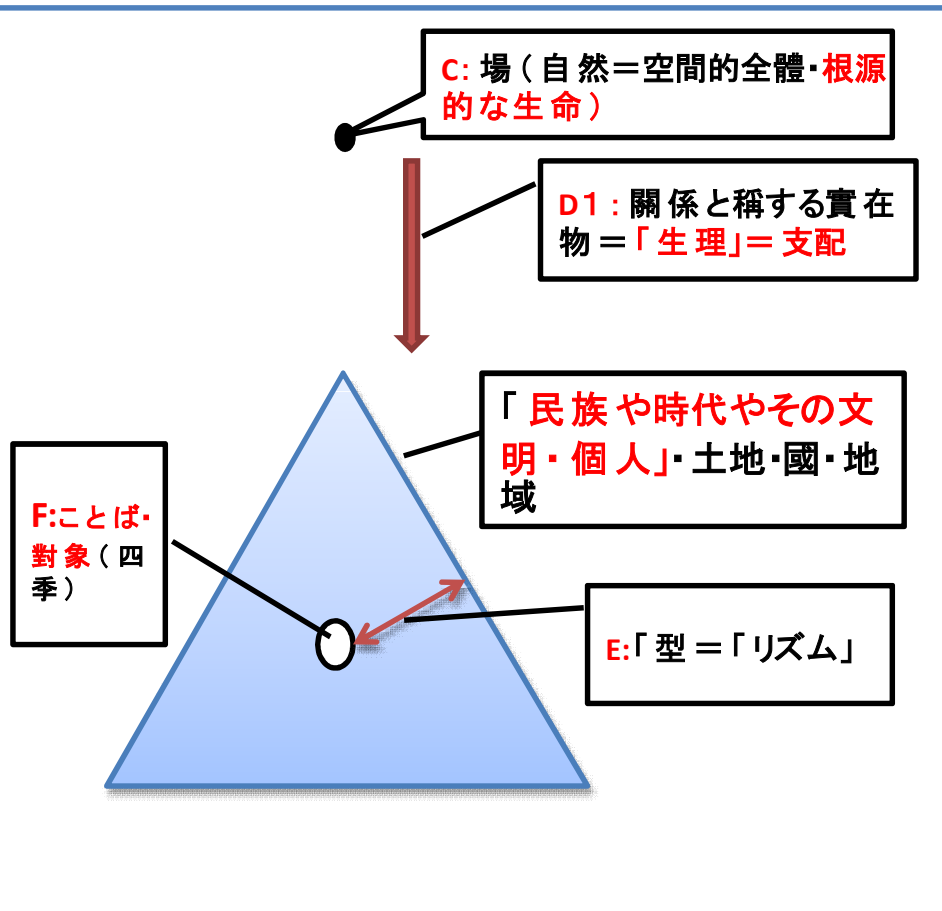


『藝術とはなにか』(①本質・假説)と以下の『せりふと動き』文・②『人間・この劇的なもの』、三者間の敷衍演繹(検證)的關聯を纏めてみたが、聊かこじつけのきらいもある。場から生ずる「關係(D1)と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(問答・對話・獨白・言葉)によつて表し得る」。故にその言葉との附合ひ方・扱ひ方(型・Eの形成=「型にしたがつた行動」)によつて、人間は場との關係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



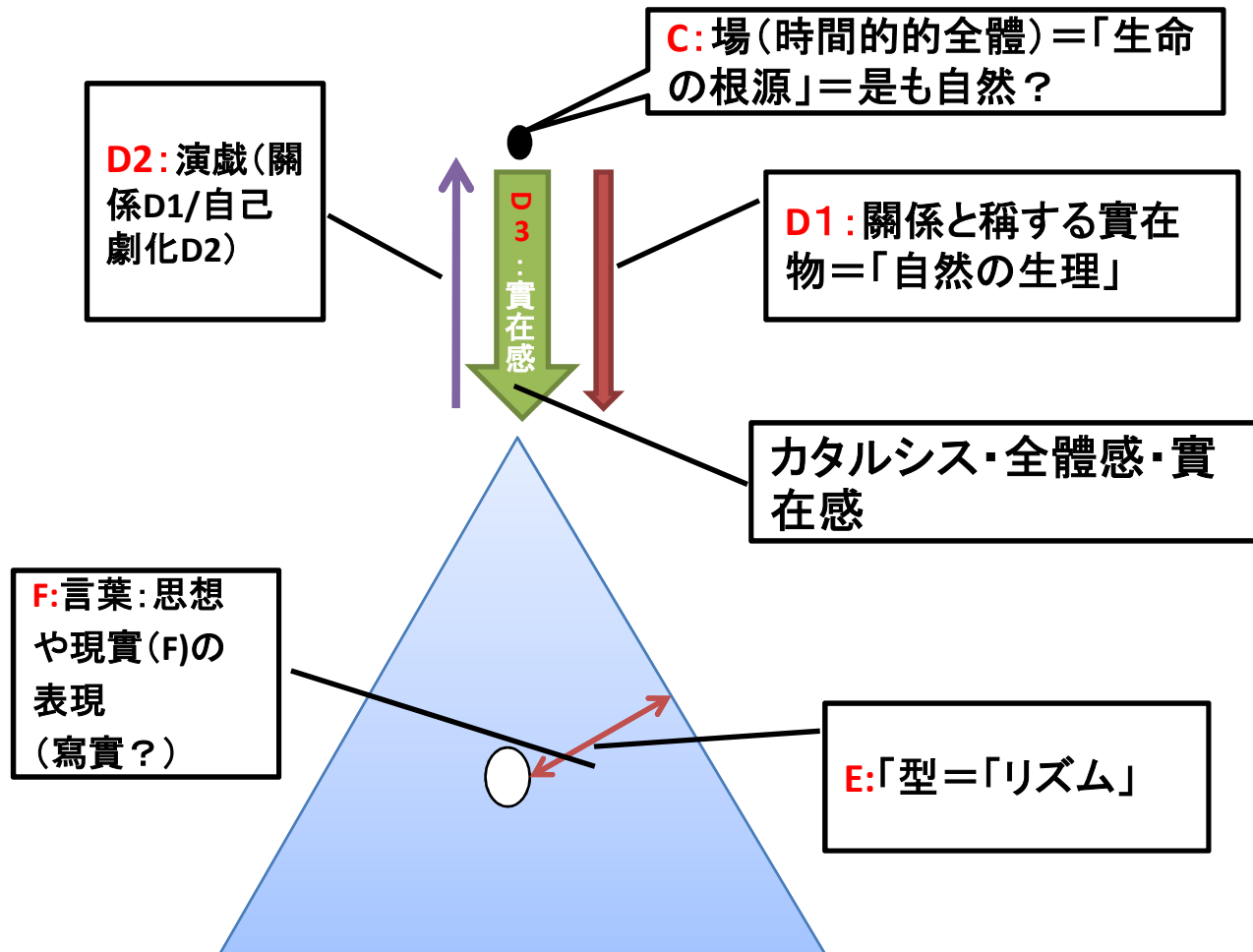
①「われわれの精神(B)も肉體(A)も、そのひとびとにおいて、一定の生理に支配されてをり、さらに民族や時代やその文明も、それぞれの生理に支配されてをり、それらは究極において根源的な生命(全體Cか?)の原理に支配されてをります。いふまでもなく、われわれがもつとも生きいい状態といふのは、特定の個人(部分?)の生理が根源的な生命(全體?)の原理と一致するときでなければならぬ。が、現實の生活においてそれは求められません」。

②〔自然と祭日(儀式)〕C: 場(自然=空間的全體)⇒D1: 關係と稱する實在物: 「生理」⇒E「型: 「リズム」。

*「祭日とその儀式は、人間が自然の生理と合致して生きる瞬間を、すなはち日常生活では得られぬ生の充實の瞬間を、演出しやうとする欲望から生れたものであり」(『人間・この劇的なもの』)

以下文(『せりふと動き』)と右枠文(『藝術とはなにか』)との關聯

* 場(C)から生ずる、「關係(D1)と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(問答・對話・獨白:言葉)によつて表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方(型・Eの形成=「型にしたがつた行動」)によつて、人間は場との關係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



①の假説は②へと深化(檢證化)されていった。

~~~~~

①文學における全體感(時間的全體感)の獲得。

・・・故に「ことばの藝術である文學は、思想や現實(F)の表現(寫實?)などではけつしてなく、生命の根源(C)からもつとも分枝してしまつた思想と現實(F)とが、その根源(C)に復歸し、自己の生理を獲得しようとする運動なのだ」(『藝術とはなにか』)

~~~~~

②「祭日とその儀式(即ち型E)は、人間が自然の生理と合致して生きる瞬間を、すなはち日常生活では得られぬ生の充實の瞬間を、演出しやうとする欲望から生れたものであり、それを可能にするための型なのである。私たちが型に頼らなければ生の充實をはかりえぬのは、既に私たち以前に、自然が型によつて動いてゐたからにほかならぬ。(『人間・この劇的なもの』)